

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780090

研究課題名(和文) 政党化する政治文化 自由民権運動期を中心に

研究課題名(英文) Politics of Fiction and Invention of Politics; political novels in late 19th century Japan

研究代表者

河野 有理 (Kono, Yuri)

首都大学東京・社会科学部研究科・教授

研究者番号：50526465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「政党化する政治文化 自由民権運動期を中心に」をテーマとする。具体的には、明治十四年前後に最盛期を迎える自由民権運動を、とりわけ政治文化 なかでも「政治小説」に焦点をあてて分析する。その際、第一に、「政治小説」を文学作品としてよりはむしろ新聞・雑誌や、演説会と同様の政治的意見表出のメディアとして把握する。第二に、「政治小説」を政党と(潜在的)有権者との間の政治的意見集約のアリーナとして把握し、演劇的熟議の観点から考察する。第三に、同時期の西欧における「政治小説」の動向や、梁啓超を介した清朝中国の知識人の動向との比較の視点を重視する。

研究成果の概要(英文)：This research tries to focus on a series of Japanese 'political novels' in late 19th century and to reconstruct the proper context in which these strange novels are situated as political thoughts or expressions of Meiji Revolution. This attempt will show that these 'political novels' was an arena or theater where political opinions were antagonize, deliberate and negotiate with each other.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：政治小説 自由民権運動 政治文化 福地桜痴 末広鉄腸 矢野龍溪 演劇的熟議

1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者の「近代日本における社会的包摂と再分配の政治思想」(2011～2014年、若手B)の成果の一つである2013年7月刊行の『日本思想史講座 4 近代』(ペリカン社)所収の申請者論文及びそれをめぐる書評会(2013年9月)をその着想の源とし、その学術的背景としては、(1)日本政治思想史における「政党」、(2)「政治小説」の比較政治思想 日本・中国・西洋、(3)「自由民権運動」の見直し、という三つの問題領域を有する。

(1)日本政治思想史における「政党」

日本の戦後政治学において、研究の焦点が政党デモクラシーにあったことは(多元論がそうした事情をいくぶんか相対化したとはいえ)、議会制民主主義を採る以上、半ば必然的であった。こうした潮流は、例えば政治史の叙述にも反映し、升味準之輔の『日本政党史論』(1965～1980年)として結実した。日本政治思想史の分野では、しかし、「政党」について正面から取り扱う研究は稀であった。明治期における「政党」概念の受容を、福澤諭吉や徳富蘇峰、陸奥らのテキストに即して分析した山田央子『明治政党論史』(1999年)は貴重な例外であるが、それに続く業績は現れていない。それは一つには、議会、政党あるいは軍といった政治制度よりは、それを支える人間の精神に関心を集中させてきたことによる。また第二に、上記の点とも関連しつつ、政党政治家や官僚の残した資料よりは、知識人や作家、あるいは新聞・雑誌記者の残した文章を用いて研究を進めてきたことによる。

こうした状況を打開する鍵となるのは、筒井清忠『昭和戦前期の政党政治 二大政党制はなぜ挫折したのか』(2012年)を始めとする、歴史社会学の潮流である。そこでは戦前期日本における(猟官制をはじめとする)「政党化」の徹底した浸透が改めて浮き彫りにされた。かかる「政党化」に対する世論の嫌悪感が、二大政党制並びに議会制民主主義を掘り崩していった事情の究明がこうした潮流の主眼であるが、「政党化」が、政治家や官僚のみならず新聞・雑誌等にまで及んでいた点への言及は、政治思想史的アプローチへの強力な援護射撃となる。政治的意見表出のメディアとしての新聞・雑誌の「政党化」の萌芽的形態が、自由民権運動期にはすでに見られるからである。

(2)「政治小説」の比較政治思想 日本・中国・西洋

自由民権運動期、新聞・雑誌と並んであるいはそれ以上に「政党化」していたのが「政治小説」である。「政治小説」では、通常、作中人物の演説を通して、作者が属する政党の党派的主張が展開される。こうした「政治小説」については、文学研究側からの蓄積は

当然に厚い(柳田泉『政治小説研究』)だが、「近代的自我」の内面把握の深度を基準とするいわゆる「近代文学」観が支配的であった文学研究においては、劇中の「演説」を主題とする「政治小説」の評価は、まさにそれが「演説」であるとの理由によって、低いものにとどまらざるを得なかった。本研究では、「政治小説」をあくまで文学作品としてではなく、演説や新聞・雑誌のような政治的意見表出のメディアとして把握する。そのことによって、文学研究の豊かな蓄積を、新たな視角から、再利用することが可能となる。「政治小説」は明治日本に限られた現象ではない。ヴィクトリア朝イングランドや第三共和政期のフランスにおいても political fiction は流行を見せていた。また、清朝中国には梁啓超を介して、日本における「政治小説」の流行が、直接的に影響を与えた。本研究では、「政治小説」を軸に、中国社会や西洋社会における政治文化の比較にも踏み込みたい。

(3)自由民権運動 演劇的熟議の観点から

申請者は「近代日本における社会的包摂と再分配の政治思想」(2011～2014年、若手B)の成果の一つである論文「演説」と「翻訳」 「翻訳合議の社」としての明六社構想」(『日本思想史講座 4 近代』所収)の執筆過程において、明治前半期の政治文化を特徴づける演説の盛行について改めて目を開かされた。自由民権運動を特にその政治文化に即して分析するという、近代史の最近の潮流はもちろんこの点への目配りを欠かしてはいない(稲田雅洋『自由民権運動の系譜 近代日本の言論の力』、2009年)が、「政治小説」への言及はない。当時、「演説」のほとんどは政談演説であり、演説会は政党活動の重要な一部であった。「政治小説」は、政党人にとっては政談演説を講じる際の演説マニュアルであり、また政府の言論規制の網をかいくぐる代替手段であった。また、(潜在的)有権者にとっては、新聞・雑誌等と同様の情報メディアであり、また、漠然と抱いている気分やムードを、小説の登場人物の議論を通して、政治的意見へと集約して行くアリーナであった。こうした意味での演説と「政治小説」の密接な連関を演劇的熟議という視点から捉えなおそうというのが、本研究のコアに存する問題関心である。

2. 研究の目的

本研究は、「政党化する政治文化 自由民権運動期を中心に」をテーマとする。具体的には、明治十四年前後に最盛期を迎える自由民権運動を、とりわけ政治文化 なかでも「政治小説」に焦点をあてて分析する。その際、第一に、「政治小説」を文学作品としてよりはむしろ新聞・雑誌や、演説会と同様の政治的意見表出のメディアとして把握する。第二に、「政治小説」を政党と(潜在

的)有権者との間の政治的意見集約のアリーナとして把握し、演劇的熟議の観点から考察する。第三に、同時期の西欧における「政治小説」の動向や、梁啓超を介した清朝中国の知識人の動向との比較の視点を重視する。

3. 研究の方法

【H26年度：基礎作業期】

本研究全体の土台を作る基礎工事を行う時期であった。研究主題となる明治前半期の「政治小説」について、fact-findingな作業はこの時期に集中的に行った。その過程で、政治思想史的な観点から再解釈された政治小説像を提示した。また、西洋や中国の「政治小説」との比較も行うために、現地調査も行う。具体的には以下(1)(2)(3)(4)の手順を踏んだ。

(1)「政治小説」に関して

- ・「政治小説」に関する研究史整理
- ・「政治小説」の思想分析

(2)「政党化」に関して

- ・政党(自由党・改進黨)に関する研究史整理
- ・政党と「政治小説」との関連を分析(矢野龍溪、末広鉄腸らについて分析)

(3)「政治小説」を巡る様々な解釈や意図

- ・読者の反応(新聞・雑誌読者欄、投書欄)
- ・知識人の反応(森鷗外、坪内逍遙の分析)

(4) 比較

- ・西洋や中国との比較

【H27年度：仮説構築期】

この段階は、すでに得られた知見をもとに、政治学的な観点から「政治小説」の分析を行う時期であった。つまり、「政治小説」を明治前半期における、新聞や雑誌、演説会とならぶ「政党化」の機関として捉えるとともに、政党と(潜在的)有権者との間の民意形成のアリーナとして捉え(演劇的熟議)分析した。具体的には以下(1)(2)(3)の手順を踏んだ。

(1)政党化に関する歴史的・理論的サーベイ

- ・政党化に関する最新の理論的知見を得た。
- ・明治前半期に関する新聞・雑誌・演説会が、上記の社会的包摂性の観点から捉え得るか、その理論的射程を検討した。

(2)代表理論に関する歴史的・理論的サーベイ

- ・政治的な「代表」に関する最新の理論的知見を得た。
- ・いかなる「代表」の理論枠組みの下であれば、明治期の政党の活動を適切に捉え得るか、その理論的射程を検討した。

(3)熟議民主主義論に関する理論的サーベイ

- ・熟議民主主義論の研究史を整理した。
- ・明治前期の「討議」観を分析した(同時期の演説資料を通して)。
- ・上記、「討議」観の前提となる「政治」観について分析した。
- ・「政治小説」や演説が、熟議的民主主義論の枠組みで捉え得るか、その理論的射程を検討した。

(3)の熟議理論と明治期の政治思想史の接合可能性に関しては、研究代表者(河野)の単著『明六雑誌の政治思想 阪谷素と道理の挑戦』(東京大学出版会、2011年)で検討の試みを行っている。その枠組みを、新たに発見・分析を行った資料に基づき、新たに彫琢し直しつつ、より広い理論的展望を示した。

【H28年度：理論検証期】

本研究の提示する仮説が、政治哲学的にはいかなるレレバンスを持ち得るのかを検討し、それに並行してその成果を積極的に内外に発信していく時期であった。現代政治理論における熟議民主主義論の枠組みによって、明治前期の「政治小説」を把握するという本研究の主張が、理論的な妥当性を持つかどうか。専門の研究者の批判を仰ぎつつ、検討した。

4. 研究成果

「政治小説」に関する記述的研究を深化させるとともに、その規範的含意について政治哲学的考察を進めることができた。具体的な成果は以下である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

(1)河野有理「近代日本政治思想史にとって儒教とは何か 儒学的「政体」論と歴史叙述」『日本儒教学会報』第一号、2017年3月、9-25頁。査読無。

(2)河野有理「政体」米原謙編『政治概念の歴史的展開』第九巻、晃洋書房、2016年9月、158-181頁。査読無。

(3)河野有理「「公民政治」の残影 蜷山政道と政治的教養のゆくえ」日本政治学会編『日本政治学会年報 2016-』、木鐸社、2016年6月、53-76頁。査読無。

(4)河野有理「「社稷」の日本史 権藤成卿と偽史の政治学」松澤裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』、史学会シンポジウム叢書、山川出版社、2015年11月、151-182頁。査読無。

研究者番号：50526465

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()

〔学会発表〕(計 5件)

(1)河野有理「近代日本政治思想史にとって儒学とは何か：儒学的政体論と歴史叙述の視点から」、日本儒教学会、シンポジウム「日本における儒教研究の現在」、於東洋文庫、2016年5月14日

(2)河野有理「秘密と情実 西周の政治思想をめぐって」、島根県立大学西周研究会・同北東アジア研究会共催第13回西周シンポジウム「明六社と西周」於島根県立大学、2015年11月28日

(3)河野有理「政体」論は何を終わらせたのか？：明治初期「政体」論の位相」、(科研・基盤研究B)日中両国における西欧立憲主義の継受主体にみる受容の態様(研究代表者：高見勝利)研究会、於上智大学、2015年2月21日

(4)河野有理「The political landscape We have lost: 儒学的政体論と歴史叙述」、北大政治学研究会、於北海道大学、2014年10月30日

(5)河野有理「天」をめぐって：加藤弘之と福澤諭吉」、Cold War Liberalism Project, Asan Institute, Seoul, Korea, 2014年7月23日

〔図書〕(計1件)

(1)河野有理『偽史の政治学 新日本政治思想史』、白水社、2017年、248頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

河野 有理 (KONO, Yuri)

首都大学東京・社会科学部・教授